

現代文法を考える

属性と個体と意味特徴

松村文芳 (まつむら ふみよし)

問題の所在——名形詞と名動詞

現代中国語では「毒」という語は「很」という程度副詞の後に用いられて、「很毒(たいへん悪らつた)」という意味を表し、また「有」という動詞の後に用いられて、「有毒(毒がある)」という構造を作ります。両者の意味の違いにより、前者の「毒」は形容詞、後者の「毒」は名詞で、それぞれ別の品詞に属しています。ところがご存知のように次の「危険」「困难」「矛盾」のような語については、「很危険¹(たいへん危ない)」と「有危険²(危ない)」を比較しても、「危険¹」と「危険²」の間に意味の違いを見いだすことは困難です。この「危険」の類の語を朱徳照

(二六三)は「名形詞」と呼び、他に「机械、理想、规矩、道德、模范」等の例をあげています(朱一九三・五—六頁参照)。また動詞、例えば「影响、准备、研究」等についても、「影响我们的工作(私どもの仕事に影響する)」、「准备明天的课(明日の授業の準備をする)」、「研究资金的周转(資金のやりくりを研究する)」といった動詞のような使用法以外に、「有影响(影響する)」、「有准备(準備する)」、「有研究(研究する)」のように動詞「有」の後に用いられて、名詞のようにふるまいます。しかし、「有看、有写、有喜欢、有同意」とは言えませんから、「写」や「同意」等の動作動詞や心理活動動詞とは異なっています(朱一九三・六頁)。

さらに「政治、思想、歴史」等といった名詞と直接に結合して、「政治影響(政治的影響)」、「思想準備(思想的準備)」、「歴史研究(歴史の研究)」のように連語を作ります。通常は、例えば名詞「老師」が名詞「书桌」を限定する場合は、「老師书桌」とは言えず、間に「的」を入れて「老師的书桌」としますから、「书桌」のような一般的な名詞とも異なることになります。そこで朱徳熙は「影響」、「準備」、「研究」等の語を「名動詞」と呼んでいます。

名形詞も名動詞も決定的な意味上の相違なしに、一方で文全体の主要述語となり、もう一方で動詞の項の一つ(目的語名詞句)になっています。用例についてはよく知られています。なぜこのような言語現象が存在するのかという点についての理由は究明されておりません。またそれぞれの例についても、ある場合には「很危険¹」と言います。有危険²とも言えるというように、恣意的に挙例されるのが常で、「危険¹」と「危険²」を統一的に説明することはできておりません。ここでは「危険¹」と「危険²」、そして「影響¹」と「影響²」を意味論の立場も交えて統一的に説明する方法を考えてみます。

言語学における「属性」と「個体」——フロバティ理論

形容詞「危険」(朱では名形詞)や動詞「影響」(朱では名動詞)がそのまま「有」という動詞の目的語になり、あたかも名詞句のようにふるまう現象を意味論上で詳しく考えてみます。Bach (1989) は「walk」あるいは「love」といった自然言語の表現 (expressions) は二重の性格を持っている。一方で「John walks」や「Bill loves dogs」のように文中の主要述語動詞として現れ、もう一方で直接に「特性 (properties)」を指示する表現「Walking is fun. (歩くのは楽しい。)」や「To love is to exalt. (愛することは想像力を高めることだ。)」のように主語名詞句として現れる (p.89) と述べています。Bachはこれ以上説明していませんので、「walk」についてもう少し検討します。単純に形式の上から考えると、「walks」は「s」が「三人称・単数・現在」を表す動詞、「walking」は「ing」が「動詞の動名詞化」を表すとしてかたづけられてしまっています。これでは「walk+s」と「walk+ing」の「walk¹」と「walk²」については何も説明していかないこととなります。どちらも日本語の「歩く」という意味を持つことは間違いありませんから、

統語論上は単語として、意味論上は「動作の属性(歩くこと)」として同一のものになります。従って単語や「動作の属性」レベルにとどまる限り、「walk₁」と「walk₂」の違いは説明できないこととなります。

Bach (1989) は“walk₁”と“walk₂”の違いを説明するために Gennaro Chierchia のプロパティ理論を紹介しています。それによるとプロパティの概念はさまざまな名詞化(nominalization) に対して意味上適切な説明を与えることができることとなります。Bach は Chierchia のプロパティ理論が形容詞の名詞化にも適用され、さらに裸の複数名詞句(bare plural noun phrases) や物質名詞についてもその意味上の現われを説明するのに役立つことを指摘しています。Bach は次のような例を挙げています。

1. This book is red. 2. Red is a popular color.
3. Fido and Tempelton are dogs.
4. Dogs are mammals.
5. This piece of metal is gold.
9. Gold is expensive.

Bach は 1 と 3 と 5 では形容詞、複数名詞句、物質名詞が述語の中で「属性(特性)」を表すものとして用いられ、

2 と 4 と 6 ではそれらが「属性」を表す完全な名詞句として用いられている旨を述べています (p. 90)。さらに 1 と 2 の“red”の関係は次の 7 と 8 の文の動詞“run”の関係とパラレルであるとしています。

7. John runs. 8. To run is fun.

Bach ではこれ以上詳しい説明をしませんので、こゝでもう少し詳しく説明しておきましょう。まず 1 と 2 についてです。1 の“red”は「赤い」という意味の形容詞です。形容詞が“be”動詞と一緒にたつて述部を構成することは形容詞の本来の役割です。また 2 の“red”は「赤」という意味の名詞です。名詞が主語になることは本来の役割です。1 と 2 の“red”はそれぞれ「赤₁ (素材表示) + …い (品詞表示)」、「赤₂ (素材表示) + φ (品詞表示) (φ はゼロ記号)」の「とく、素材表示と品詞表示の両方の役割で構成されています。この二つの“red”について、意味を深く考えるにはまず統語論の情報である「…い (品詞表示 φ)」と「φ (品詞表示)」を取り除き、「赤₁ (素材表示)」と「赤₂ (素材表示)」に焦点をします。どちらも色の「属性(特性)」を表していますが、詳しく文に即して言えば、「赤₁ (素材表示)」は“This book”の「属性」を表し

ています。しかし、2の「赤₂（素材表示）」は文中では色の「属性」というよりも【a popular color】という「属性」を持つ「個体」を表しています。

従って「赤₁」は「属性」を、「赤₂」は「個体」を表すこととなります。しかし、文を離れて「赤₁」、「赤₂」を単独で考えると、それらが持つ「素材表示」が色の「属性」であることはまちがいになく、従ってその一種抽象的な「属性」が「赤₁」の場合は「属性」そのものになって、述語を構成し、「赤₂」の場合は「属性」が「個体」として文中の項の一つになったと考えられます。

以上の議論はいわゆる「属性」には二面性があることを示しています。白井（一九九）では、Churchiaがプロパティ理論の基本概念はフレーゲの属性に対する見方に遡るとしていることを指摘しています。その考えによると、「属性」は二重のモードを持つ存在体と言える。モード1では属性は概念的に「飽和」されていらない存在体であり、この場合には叙述での述語としての役割を果たす（引用者注：これは前述の「飽和」）。他方モード2では「属性」は飽和された概念としての個体としての性質を持ち、この場合には叙述構造の項としての役割を果たす（これは前述の「red₂」）(p.

89-90)と述べています。

国語学における内面的意義——素材表示の機能

渡辺実（一九七）は「本箱がある」「負けるが勝ち」「安い」「自慢」の三種の表現に対して、名詞「本箱」と動詞の連体形「負ける」及び「形容詞」の連体形「安い」は彼の主張する構文的職能の上では同資格であると解釈します。彼は上述の三語の構文的職能を「素材表示の職能」と呼んでいます。が、構文的職能の上で同資格であるからこそ、上例のように「ガ」という同じ形式がそれらに平等に結合するのである（三三頁）と述べています。ここで「本箱がある」「負けるが勝ち」「安いが自慢」について詳しく考えてみましょう。まず「本箱がある」の「本箱」が「個体」であることは問題ありません。ところが「負けるが勝ち」の「負ける」は本来動詞であり、動詞が名詞化した形になっています。しかし、これは名詞化ではなく、「負ける」という動詞に内在する「負け」という動作属性（渡辺の素材表示）が「個体」として、現実化したと考えます。これに対し、「試合で負ける」の「負ける」は「負け」という動作属性がそのまま動作として述語化（現実化）したと解釈します。

同様に「安いが自慢」の「安い」は名詞化ではなく、「安い」という形容詞に内在する『安い』という値段属性（渡辺の素材表示）が「個体」として現実化し、「値が安い」の「安い」は『安い』という値段属性が性質として述語化（現実化）したと考えます。

ここで渡辺（二七二）の中心をなす構文的職能について説明しておきましょう。次の「桜の花が咲く。」という文の「桜の花」という部分を取り出してみます。渡辺によれば「サクラ」という形態に担われた「桜」の意義には「花」を限定すべき限定内容という役割が託され、「ノ」という形態に担われた『関係概念』の意義には「桜」を限定内容が託され、「ハナ」という形態に担われた『花』の意義には限定対象という役割が託され、これらがそれぞれの役割において統合することによって、『桜の花』という有機的結合体が単なる意義加算を越えたものとして形成されるのだと解される。…（中略）…このような言語の内面的意義に託されるころの、文の有機的統一性を形成するための役割を総称して構文的職能と呼ぼう（二五頁）」と述べられています。

この渡辺の説明には重要な点が二点あります。その一つは内面的意義に構文的職能が託されるという点です。いま一つは「有機的」という術語です。渡辺はなぜ有機的という語が必要であるかについては何も述べていません。思うに例えば「桜」と「ノ」と「花」という事物や関係概念を結び付けても、そのままでは「桜の花」という実在物を得ることはできません。なぜなら「桜」も「花」も別々の「個体」であって、二個の個体が「桜の花」という一個の個体になることは現実には不可能だからです。そこで渡辺は「単なる意義加算を越えたものとして形成される」という注釈をつけ加えました。この注釈によって「桜」＋「ノ」＋「花」＋意義加算を越えたものが「桜の花」を作り上げることを説明しました。この「意義加算を越えたもの」が「桜の花」という有機的結合体を作ることになります。想像するに「有機的」という語はまさに「野菜くず」の集合から「有機土壌」が作り出されるように、単なる算術的加算ではなく、一種の「化学反応」に準ずるような「個体」から「属性」への転化が行われた後に「属性」の加算が行われていることを抽象化して述べたものでしょう。

渡辺（二七二）は、①内面的意義に託される構文的職能と、

②文成分を有機的結合体ととらえることによって、内面的意味「属性」「素材表示」をベースにした統語論を構築しました。ここで渡辺を取り上げたのは、彼の「素材表示・関係構成」の要素がChierchiaのプロパティ(特性/属性)に類する概念であることを指摘しておきたかったためです。さらに補足すればChierchiaの“red”の「属性」が「属性」そのものとして現実化した“The flower is red.”の文は、渡辺の「安い」の「素材表示」の要素が「統叙の職能」を担って文を完成させた「値が安い。」とパラレルになっています。一方Chierchiaの“red”の「属性」が「個体」として現実化した“Red is a popular color.”は、渡辺の「安い」の「素材表示」の要素が「連体の職能」を担って主語として一個の項をなす個体として現実化した「安いが自慢。」とパラレルです。

問題の解決に向けて

再び「危険」／「影響」／「個体」

前述の議論を参考に再び「危険」と「影響」について考えてみましょう。「危険」¹は次の「你这样做很危险(君がそうするのは危険だ)。」の文に現れています。ここでは

「危険」という語に内在する『危険』(危険であること)という性質属性(素材表示の要素)が全文の述語として現実化しています(統叙の職能)。一方「危険」²は「他们过封锁线时,遇到了危险(彼らは封鎖線を抜ける時、危険にあった)。」の文に現れています。ここでは「危険」という語の『危険』という性質属性が「遇到了」という述語動詞にかかわる項の一つ(対象格)として、「個体」として現実化しています。一般には「危険」¹は形容詞、「危険」²は名詞と区分されます。朱徳熙が「名形詞」と呼称したのは彼が「危険」という語の表面的なふるまいにまどわされず、その語に内在する『危険(危険であること)』という抽象的な性質属性を明確に意識していたことを示しています。次に「影響」¹は「春寒影响农作物生长(春の寒さは作物の成長にひびく)。」に現れています。ここでは「影响」という語に内在する『影响(影響すること)』という作用属性(素材表示)が述語として現実化しています。一方、「他的研究受到影响(彼の研究は影響を受けた)。」では「影响」²が現れています。ここでは「影响」という語に内在する『影响』という作用属性が「受到」という述語とかかわる項の一つ(対象格)として、「個体」として現実化し

ています。

中国語文法論における意味特徴

—— 陆俭明(一九九三)の意味(语义)特徴分析

上述の議論ではおおまかに単語に内在する属性と個体との関係について扱いました。実際には単語の属性は様々な要素によって構成されています。従って一個の単語だけの属性(意味特徴)を抽出するたいへん恣意的になります。そこである語の意味特徴を抽出するには多くの実例を集め、その実例の中の問題となる語に共通する意味特徴(単語以下の単位)を抽出する方法が有効になります。そのような方法による分析が次に紹介する陆(一九九三)です。

陆(一九九三)の意味特徴に対する考えは、①「关于“去+VP”和“V+去”句式(二五—三三頁)(一九九三)でめばえ、②“V来了”试析(三一—三五頁)(一九九三)で発展し、③“VA了”述补结构语义分析(一九九三)”で適用範囲の拡大をしたことがわかります。ここでは②のみを簡単に紹介します。②では“V来了”の形式をA(述語目的語関係)、B(述語補語関係)、C(連動関係)に区分します。Aは“同意来/了(来ることに同意し/た)。”、Bは“走来/了(歩いてき/た)。”、Cは“休息/来了(休息に/来た)。”のような例があります。陆は、(1)A類に属する動詞には“认为(…と考える)、估计(推測する)、感到(感じる)、觉得(思う)、盼望(願う)、打算(もくろむ)”等がある

(以下V a類)。これらの動詞は、(a)例えば「来ること」のような「動詞性の目的語」を持ち、(b)「具体的な方向を表す補語」を持たない(例えば「认为来、认为去」とは言わない)。(c)さらにこれらの動詞に意味上共通する点をさがすと、いずれも人間の心理あるいは感覚の活動とかかわっていることがわかる。そこで陆はV a類の動詞の意味特徴を「十心理」であると記述する。(2)またB類に属する動詞には「上(あがる)、下(さがる)、拉(引っ張る)、搬(運ぶ)、抱(抱く)、抓(つかむ)」等がある(以下V b類)。

これらの動詞の特徴は、(a)「動詞性の目的語」を取らず、(b)「具体的な方向を表す補語」を取ること。(c)さらに意味上「上、下」は「動作主の位置の移動」を表し、「拉、搬」は「動作の対象物の位置の移動」を表し、「抱、抓」は動詞だけでは事物の位置の移動を表さないが、「V来了」の中に用いられると、全体としては「つきりと事物(動作の対象物)の位置の移動を表す。そこで陆はV b類の動詞の意味特徴を「十位置移動」と記述する。(3)第三にC類に属する動詞には「吃(食べる)、洗(洗う)、洗澡(入浴する)、聊天(世間話をする)、汇报(まとめて報告する)、欢送(歓送する)」がある(以下V c類)。これらの動詞の特徴は、

(a)「動詞性の目的語」を持たず、(b)「具体的な方向を表す補語」を取らない。(c)さらに意味の上では「来」は「動作主の位置移動」を表し、V cは「動作主の位置移動のための目的を持った行為や動作」を表している。そこで陆はV c類の動詞の意味特徴を「十目的性の行為」とする。陆(一九三)はさらにV a、V b、V c類の動詞について、意味特徴を振り所にして分析をすすめています。以下は省略します。

【参考文献】

Bach, Emmon. 1989. *Informal Lectures on Formal Semantics*.

New York, State University of New York Press.

陆俭明 一九三『陆俭明自选集』(郑州, 河南教育出版社)

白井賢一郎 一九一『自然言語の意味論』(東京, 産業図書)

渡辺実 一九二『国語構文論』(東京, 培書房)

朱德熙 一九三『语法讲义』(北京, 商务印书馆)

(神奈川大学・現代中国語統語論、意味論)